

ぶつかり合う岩山—— 尖閣諸島と2冊の航路案内書



デビッド・ヘリウエル
(オックスフォード大学ボドリアン館学芸員)

2013年7月17日

このブログ (<http://oldchinesebooks.wordpress.com/2013/07/>) のタイトルは、2013年7月9日付『インディペンデント』紙(28-29面)のデビッド・マクニール氏の記事を参考にした。記事の中で使われていた画像はおそらくインターネット上にあったものだろう。下の写真がそれだ。あちこちで使われているものだが、なかなかいい写真である。



記事は尖閣群島に関するものだった。尖閣群島とは、東シナ海上、台湾と沖縄の間に浮かぶ岩だらけの無人の島嶼群だ。「尖閣諸島」と日本名で呼ぶのは、この地域でのアメリカの利益を背景に、日本の領有が国際的に認められているからである。ただし中国と台湾も領有権を主張しており、それぞれ「釣魚島」「釣魚台」の名称で呼んでいる。領有権をめぐる各方の立場は、その主張を含め、ウィキペディアの「Senkaku Islands dispute (尖閣諸島紛争)」に解説されている。また、かなり前になるが、ダニエル・ジューレック氏もこの問題について詳しく論じている。ジューレック氏の論文はこちら (<http://www.ibru.dur.ac.uk/resources/>)

docs/senkaku.html)を参照されたい。

尖閣諸島の名称として記録に残る中で最も古いのは「釣魚台」だが、偶然にも、オックスフォード大学ボドリアン館には「釣魚台」という地名が記された古い航路案内書が2冊所蔵されている。今回、私がこのブログで尖閣諸島を取り上げることにしたのはそのためだ。

航路案内書はいずれも、1935年11月から36年12月までオックスフォードに滞在していた向達によって発見された。向達は、国立北平図書館副館長だった袁同礼、オックスフォード大学で中国哲学・宗教学の准教授に任命されて間もないE.R. ヒューズ、そしてボドリアン館長だったエドモンド・クラスターの計らいで同地に滞在し、ボドリアン館所蔵の中国資料の目録を作成していた。彼のオックスフォード滞在については、最近上梓された追悼集の中でフランシス・ウッドが書いており(『敦煌文献・考古・藝術総合研究: 紀念向達先生誕辰110周年国際學術研討會論文集』樊錦詩、榮新江、林世田主編/北京/中華書局、2011年/ISBN: 978-7-101-08337-8)、原文(英語)はこちら(<http://www.bodley.ox.ac.uk/users/djh/serica/oldchinesebooks/FrancesWoodXiangDa.pdf>)で読むことができる。

オックスフォードでの向達の仕事は、少なくとも2つの理由から、とりわけ重要であったと言える。

まずボドリアン館では初となる中国語のカード目録を作成したこと。ウッドが述べているように、目録はしっかりとした方針で作成されており、他の図書館から手本とされるほどだった。私自身、1991年にカード作成が機械化されて目録が廃止されるまで、新たな目録を追加していた。

そしてもう1つ、北平図書館(現・中国国家図書館)発行の雑誌に、ボドリアン館所蔵の中国資料に関する長い論文(『瀛涯瑣誌—記牛津所蔵的中文書』9-44頁、北平圖書館館刊、10巻5号、1936年)を書き、極東の読者に広く紹介したこと。多少の誤りは含まれているものの、論文は現在でも読まれている。

向達が著したこの論文によって、中国研究の分野(そして政治の世界)で2冊の航路案内書の存在が初めて認識されたと私は考えている。ただし論文が書かれた1936年当時、釣魚諸島の領有権はほとんど問題になっ

ていなかった。そのため書中の他の諸地点と別にわざわざ言及する理由もなかった。

25年後に向達はそれら航路案内書の全文転写に解説を添えて出版した。

兩種海道針經/向達校注

北京: 中華書局, 1961

平装1冊(277頁): 圖, 地圖; 18公分

(中外交通史籍叢刊)

附地名索引

統一書號 11018.142

その結果、2つの航路案内書は極東で広く知られるようになり、ここ数年はさまざまなウェブサイトで見ることができるようになった。ただし航路案内書そのものの画像は最近作成されたばかりで、まだ自由に見られる状況にはない。近々、当ウェブサイトから完全な形で閲覧できるようにするつもりだが、興味をお持ちの読者のために、「釣魚台」に言及した4か所(1冊につき2か所ずつ)をスキャンした画像をお目につけよう。その前にまずは航路案内書について少し説明しておきたい。

1冊目は『順風相送』、通称「ロードの航路案内書」。目録には次のように記されている。

順風相送: 不分卷/ (明) 佚名撰

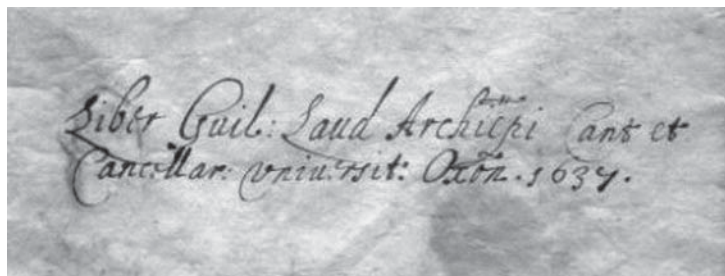
明抄本

洋装(原線装)1冊; 26公分

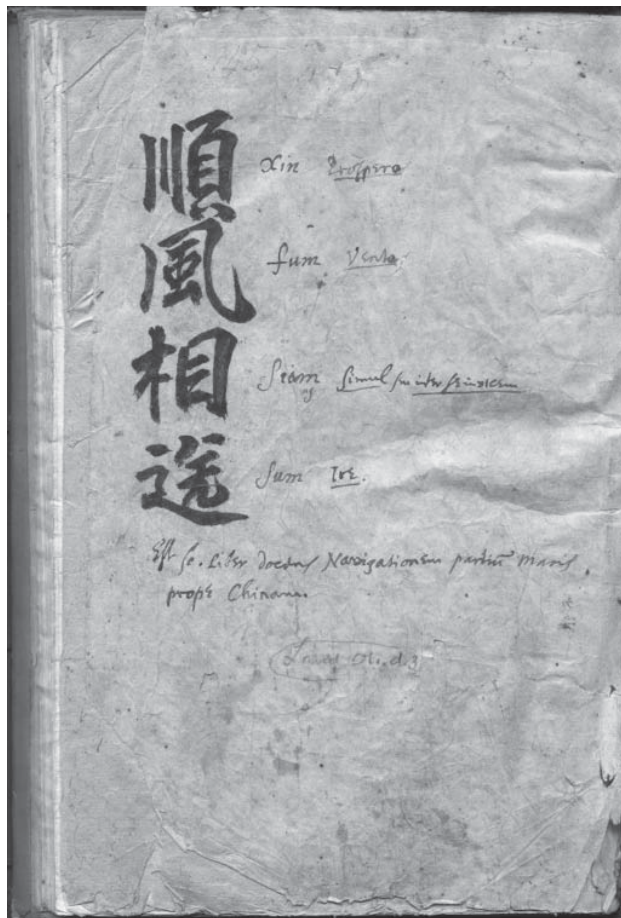
MS.Laud Or.145

タイトルは表紙にのみ記され、発行年の記載もないが、向達は16世紀に作成された可能性がきわめて高いとみている(4頁)。著者が誰なのか、またロードがどのようにして手に入れたのかは分かっていない。向達は、イエズス会がヨーロッパで運営する大学を経由して入手した可能性を指摘している。実際、ロードの写本の大半はヨーロッパ大陸から渡って来たものだった。

『順風相送』に残る手書きの文字から、ボドリアン館に収蔵されたのは1639年であることが分かる。



また、1687年に沈福宗とトーマス・ハイドが調査したことも記されている。



一方、もう1冊は、兵法に関する選集の附属文書である。分類番号から、選集は1913年から22年まで段階的に収蔵された「バックハウス・コレクション」の一部であることが分かる。

兵鈴：内書八卷外書八卷／（清）呂礪，（清）盧承恩編

附 指南正法：不分卷／佚名撰

清康熙乙卯 [1675] 序鈔本

線装7冊：圖；30公分

有「曾存定府行有恒堂」印記

Backhouse 578

選集は印刷されなかったようだが、写本はいくつか現存している。北京大学図書館に完全なものが1部と不完全なものが2部、南開大学図書館に1部、プリンストンに不完全なものが1部。ちなみに附属文書まで含むのはバックハウスの写本だけである。

バックハウスの写本の序文には「1675年」と記されているが、実際にはもう少し後、康熙帝時代（1661-1722）の末期に書き写され、その際に附属文書が加えられたと向達は見ている。バックハウスの写本にだけ附属文書があることが、その見方を裏付けている。

最近、この写本に残された単一の印章（編者注：曾存定府行有恒堂の印）を活字転写してインターネットで調べたところ、かつては載銓（1794-1854）という人物が所有していたことが判明した。さらに青銅製の印章そのものもネット上で確認できた。印章とその所有者をこれほど簡単に特定できるケースは非常にまれだ。以前述べたように、ネット上の情報はすぐに消えてしまうので、後世のためにウェブサイトはこちら（<http://www.bodley.ox.ac.uk/users/djh/serica/oldchinesebooks/Backhouse578SealArticle.pdf>）に保存した。

以下、釣魚台についての記述がある頁の画像を掲載する。もともと写本に頁番号は振られていない。タイトルに併記した数字は、数十年前に当地で写本のすみに鉛筆で書き入れられたものである。